



つなぐー全国へ、世界へ、そして次世代へ、未来へ



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN



日本ユネスコ国内委員会
Japanese National Committee for UNESCO



—第8回ユネスコスクール全国大会— 持続可能な開発のための 教育(ESD)研究大会

つなぐー全国へ、世界へ、そして次世代へ、未来へ

報告書

開催日：平成28年12月3日(土)

会場：国立大学法人金沢大学

主催：文部科学省／日本ユネスコ国内委員会

第8回ユネスコスクール全国大会 持続可能な開発のための教育(ESD)研究大会

報 告 書

平成28年12月3日(土)

国立大学法人金沢大学

主催：文部科学省 日本ユネスコ国内委員会

共催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
国立大学法人金沢大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

後援：外務省、環境省、石川県教育委員会、金沢市教育委員会、全国連合小学校長会、
全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園・こども園長会、
日本私立大学協会、一般社団法人日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会、
日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、公益社団法人日本PTA全国協議会、
全国国立大学附属学校連盟、一般社団法人国立大学協会、
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet)、ESD活動支援センター、
株式会社教育新聞社

協力：イオントップバリュ株式会社、ネスレ日本株式会社、株式会社ユニクロ

目 次

◆総括	6
◆実施概要	7
◆告知	8
◆大会日程	9
◆開会式	10
◆ESDの更なる推進に向けて	12
◆パネルディスカッション	
「つなぐー全国へ、世界へ、そして次世代へ、未来へ」	14
◆テーマ別交流研修会	
ESDの浸透、校内連携（幼小）（中高）	22
地域連携（幼小）（中高）	23
教科とのリンク	24
学校間交流	24
企業・NPO等との連携	25
グローバル人材の育成とESD	25
ESDの評価	26
ESDの目標（SDGs、GAP、岡山宣言など）への対応	26
教育委員会との連携・取組	27
学習指導要領とESD	27
◆中国・韓国のユネスコスクールでの活動事例紹介	28
◆ネットワーク構築についての報告	34
◆ランチョンセッション（協力企業による社会貢献活動の紹介）	36
◆第7回ESD大賞表彰式・閉会式	38
◆アンケート結果	41
◆協力企業・展示団体一覧	

総 括

第8回ユネスコスクール全国大会（主催・文部科学省、日本ユネスコ国内委員会）は、平成28年12月3日（土）、石川県金沢市の金沢大学角間キャンパスにて、「つなぐー全国へ、世界へ、そして次世代へ、未来へ」をテーマに開催された。パネルディスカッションや交流研修会などが行われ、教育関係者ら635名が参加した。

開会式で松野博一文部科学大臣は「日本のユネスコスクールは、ESDの推進拠点として特色のある取組を展開してきた。これは生きる力の育成につながるものだ」と強調した。また安西祐一郎日本ユネスコ国内委員会会長は「学校でのESDの実践は、持続可能な社会を担う人材育成や、地域コミュニティ全体の持続可能性へとつながる」と訴えた。

続いて、文部科学省の担当官から、「ESDの更なる推進に向けて」の施策や課題について共有があった。パネルディスカッションでは、今大会のテーマを議題に意見を交わした。パネリストの望月浩明神奈川県立有馬高校教諭は、ユネスコ共同学校が衰退した原因を教員の転任や退職などにあると指摘、解決策にも言及し、「学校間のネットワークが必要である。加えて、生徒のクラブ活動を通じて主体的に行うことも大事である」と語った。さらには神奈川県内の高校や大学で構成する、神奈川県ユネスコスクール連絡協議会の活動に関しても発表がなされた。同じくパネリストの鈴木克徳金沢大学教授は、北陸ESD推進コンソーシアムについて、ESDを推進するためのコーディネーターの重要性を主張した。その上で、北陸3県でユネスコスクールへの加盟が広まった理由について、「困ったときに相談できる支援体制が功を奏した」と話した。

昼の休憩時には、ESD関連企業3社によるランチョンセッションが開かれ、特に衣食住に関連する企業がもつ知見を生かした学校への教育支援の取組が紹介された。

午後のプログラムでは、大会の軸となる交流研修会が10のテーマで開かれた。ユネスコスクールの事例が報告された後、ESDを通じた授業改善や学習評価、ESDの目標への対応など各テーマに沿ってディスカッションが行われた。

続く全体会では、中国・韓国よりユネスコスクールの教員を招聘し、それぞれの活動発表が行われた。中国の事例では、「詩経」に登場する植物から自国の伝統的な価値観や暮らしを学び、生徒自身の生活や未来に生かす活動の例などが紹介された。また韓国の事例では、地域と学校とのネットワークづくりや環境・平和・地域文化をテーマにした活動など、独自の教育メソッドが語られた。

その後、各分科会からの研究協議の報告と、住田昌治神奈川県横浜市立永田台小学校校長から、ユネスコスクール全国ネットワーク会議の活動や成果に関する報告があり、オンライン等を活用した情報共有および交流、相互成長の必要性について言及があった。

閉会式では、第7回ESD大賞の表彰式が行われたほか、木曾功NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事長が挨拶し、今後のESDへの展望を示した。

実 施 概 要

■日 時 平成28（2016）年12月3日（土） 受付9：15～ 開会9：45／閉会17：15

■会 場 国立大学法人金沢大学（〒920-1192 石川県金沢市角間町）

■対 象 ユネスコスクール教員、一般幼小中高教員、都道府県・市区町村教育委員会、ユネスコスクール協力者（企業、NGO／NPO、PTA、大学生、専門家など）、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）、一般参加者等

■参加者 総計 635名

■主 催 文部科学省 日本ユネスコ国内委員会

■共 催 N P O法人日本持続発展教育推進フォーラム
国立大学法人金沢大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

■後 援 外務省、環境省、石川県教育委員会、金沢市教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園・こども園長会、日本私立大学協会、一般社団法人日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、公益社団法人日本P T A全国協議会、全国国立大学附属学校連盟、一般社団法人国立大学協会、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）、ESD活動支援センター、株式会社教育新聞社

■協 力 イオントップバリュ株式会社、ネスレ日本株式会社、株式会社ユニクロ

告 知

大 会 日 程

■チラシ

(表)



(裏)



■ポスター



時間	プ ロ グ ラ ム
09:15 ～	受付 ※ESD関連企業・団体による展示
09:45 ～ 10:00	開会式 主催者挨拶 松野 博一（文部科学大臣） 安西 祐一郎（日本ユネスコ国内委員会会長） 山崎 光悦（金沢大学長） 特別来賓挨拶 馳 浩（衆議院議員、前文部科学大臣）
10:00 ～ 10:15	ESDの更なる推進に向けて 福田 和樹（文部科学省国際統括官付 国際戦略企画官）
10:15 ～ 11:30	パネルディスカッション 「つなぐー全国へ、世界へ、そして次世代へ、未来へ」 鈴木 克徳（金沢大学国際基幹教育院教授、北陸ESD推進コンソーシアム事務局） 望月 浩明（神奈川県立有馬高等学校教諭、神奈川県ユネスコスクール連絡協議会事務局） コーディネーター：及川 幸彦 （東京大学海洋アライアンス機構主幹研究員、日本ユネスコ国内委員会委員）
<<移動・休憩 15分>>	
11:45 ～ 12:45	ランチョンセッション（ESD関連企業による社会貢献活動、学校支援活動の紹介） イオントップバリュ株式会社、ネスレ日本株式会社、株式会社ユニクロ
<<移動・休憩 15分>>	
13:00 ～ 14:45	テーマ別交流研修会（12分科会）
<<移動・休憩 10分>>	
14:55 ～ 16:00	中国・韓国のユネスコスクールでの活動事例紹介 中国：李 荔萍（北京師範大学附属实验中学 教育調査部長） 韓国：チェ・ジョンア（慶尚南道金海市立石峰初等学校 教諭）
16:00～16:45	テーマ別交流研修会の報告 ファシリテーター：税所 要章（東京都教職員研修センター教授） 棚橋 乾（東京都多摩市立連光寺小学校校長） ネットワーク構築についての報告 住田 昌治（神奈川県横浜市立永田台小学校校長）
16:45 ～ 17:15	第7回ESD大賞表彰式・閉会式

開 会 式

～第8回ユネスコスクール全国大会／持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会開催に寄せて 司会進行：文部科学省国際統括官付 国際統括官補佐 鈴木 規子



1) 文部科学大臣 松野 博一

開催に当たり、ご参加の皆様を心より歓迎するとともに、持続可能な開発のための教育の推進に日頃からご理解とご協力をいただき深く感謝申し上げたい。

本年5月のG7教育大臣会合で採択された倉敷宣言では、国際社会の平和を守り持続可能な発展を促進するために教育の重要性が謳われた。昨年、国連で採択された持続可能な開発目標（SDGs）においても教育が目標の一つとされており、教育は持続可能な社会づくりに欠かせない

ことが国際的に認識されている。

我が国のユネスコスクールは、ESDの推進拠点として特色あるさまざまな取組を展開してきた。ESDは、世界情勢が大きく変化する中で、身近な課題について自分ができることを考え行動していく学びが、地球規模の課題につながっていくという理念に基づいている。これは、まさしく我が国が目指す「生きる力」の育成につながっている。また、ユネスコスクールの取組は、世界各国の友好を目的とするユネスコの理想に共鳴し、世界中の人々とともに未来に向けて歩んでいくための糧となるものである。

本年1月の日中韓教育大臣会合における馳前文部科学大臣の提案により、本日は中国と韓国からユネスコスクールの教員をお招きすることができた。この場を借りて、両国の関係者の皆様と馳前大臣のイニシアチブに御礼申し上げたい。本大会のテーマは「つなぐー全国へ、世界へ、そして次世代へ、未来へ」である。本大会が国内外の取組の共有と発信の場となり、さらには新しい時代を開いていくための有意義な機会となることを期待している。

結びに、これまでユネスコスクールのESD推進にご尽力いただいた皆様、大会開催に当たりご支援、ご協力をいただいた山崎学長はじめ金沢大学の皆様、ご出席の全ての方々に深く感謝申し上げるとともに、本大会が皆様にとって実り多きものになることを祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

2) 日本ユネスコ国内委員会会長 安西 祐一郎

ユネスコスクール関係者の皆様には、日頃より持続可能な開発のための教育（ESD）をはじめとするユネスコ活動の推進にご尽力いただき厚く御礼申し上げたい。

昨年、国際社会全体の開発目標として設定された持続可能な開発目標（SDGs）が採択された。ESDはSDGsの目標達成のために基幹となる取組であり、SDGsについて知り、実現に向けた課題や各ゴール間の相互関係について考え、自ら行動できるような知識・態度・技能を身につけること、学校や地域のあらゆる場においてSDGsについての学習を進めていくことが重要になってきている。

日本ユネスコ国内委員会においては「ESD推進の手引」の作成や、それを活用した研修の実施など、学校現場にESDの浸透を図るとともに、ユネスコ活動を通じた我が国としての国内外におけるSDGsの実現に向けた推進方策を検討することを目的に、SDGs推進特別分科会を設置し議論している。持続可能な



社会を実現するためには、人間と地球にとって持続可能でレジリエント（回復力のある、しなやかな、強靱な）な未来をつくるための協調的な取組が不可欠である。

今日の機会が全国各地の実践者のつながり、またそれぞれの活動に対する振り返りの機会となり、持続可能な未来を創造するための新たなアイデアが、さまざまな方々による議論の蓄積で広がっていく場となり、特に本大会がそうした場となることを期待している。

最後に、山崎学長、金沢大学の皆様、また本大会に関わる全ての関係者に深く感謝すると共に、本大会が今後のユネスコスクールの活動やESDの前進に向けて充実したものになるよう祈念してご挨拶とさせていただきます。

3) 金沢大学長 山崎 光悦

会場大学の学長として皆様のご来場を心より歓迎したい。

持続可能な開発のための教育（ESD）については、「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」に基づき、ESDを推進していくことが世界的に合意された。我が国では、本年3月に「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム」国内実施計画を決定するなど、ESDは持続可能な社会づくりに向けた人材育成方策として、今後ますます重視される見込みであり、全国に約1,000あるユネスコスクールは、ESD推進の中核的拠点として一層重要な役割を果たすことが期待される。

本学では卒業する全学生が備えるべき資質・能力を「金沢大学＜グローバル＞スタンダード（KUGS）」として定め、これに沿った教育改革・国際化改革を進めている。ESDを全学生が学ぶべき選択必修科目とするなど、本学はESDに関わる教育、研究の強化に努めている。また、北陸ESD推進コンソーシアムを立ち上げるなど、北陸地域全体におけるESD推進の中心的存在として貢献している。今後も引き続き、ESDをはじめとするグローバル人材の育成に努めていきたい。

最後になるが、本大会の開催機会を下さった文部科学省、日本ユネスコ国内委員会の皆様はじめ、大会の成功に向けてご支援いただいた皆様はこの場を借りて御礼すると共に、本大会が実り多く、皆様にとって良い成果が得られるものになるよう祈念してご挨拶とさせていただきます。



4) 特別来賓挨拶 衆議院議員／前文部科学大臣 馳 浩

金沢大学にて大会を開催いただいたことに御礼申し上げたい。

本年1月末、ソウルにて初の3カ国による日中韓教育大臣会合が開催され、韓国や中国の方々と今まで以上に仲良く、お互いを理解するつき合いをしていきたいと思っている。当会合を「毎年続けよう」ということになり、来年は日本で開催する予定になっている。お互いの立場を理解し尊重し合うことは大切である。とりわけ、地政学的に隣人同士の関係は大切であり、欧州で起きている出来事を他人事のように見ているわけにはいかず、移民や難民の方々ともつき合っていかなければならない。世界情勢に対しても、いかに我々がユネスコの精神を理解し実践していくかを、本大会を通じて皆さんと考えていきたい。

昨年の国連大学の予算書によれば、国連大学に拠出金を出しているのは全国自治体の中で金沢市と石川県だけである。合わせて約6,000万円を拠出いただいており、国連大学を通じてESDの事業に貢献いただいている土地柄である。里山に囲まれたこの金沢大学で、大いに本大会の成果をあげてもらいたい旨をお伝えし、歓迎のご挨拶とさせていただきます。



ESD の更なる推進に向けて

福田 和樹（文部科学省 国際統括官付 国際戦略企画官）

【ESDについて】

◆ESDに関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）

GAPは2015年に始まり、2017年は3年目に当たる。3年間の成果と2019年以降についての議論を開始しなければならない時期にある。ユネスコとも協議を開始しているし、これまでの成果を世界全体で総括する国際会議を2017年3月にカナダで開催する予定で、私どもとしても日本の成果をまとめ世界に発信していきたいと考えている。その過程で、各学校現場における取組と成果を共有・発信していく必要がある。今後ともご協力をお願いしたい。

◆ESD推進ネットワーク

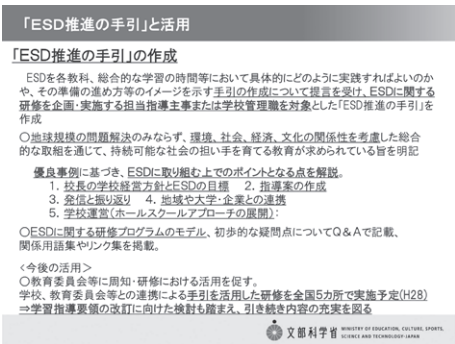
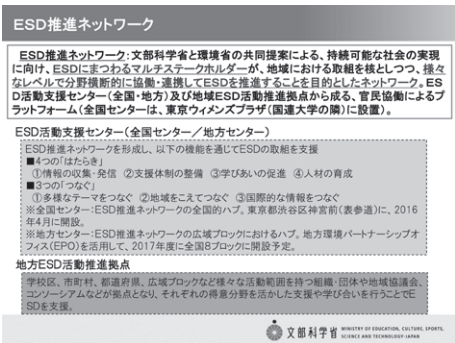
文部科学省および環境省が連携する形でESD活動支援センターを設置している。国、民間、さまざまな立場の方々が情報を交換し、連携していく機能を担っていく存在で、先週にも大きな会合が開催された。センターの活動にご協力いただくとともに、ぜひご活用をお願いしたい。今後、地方でもネットワークを構築することになるため、先生方が学校現場で動きやすくなるよう、私どもの方から各都道府県教育委員会等に対して協力依頼の通知を出している。その点もご確認いただきたい。

◆ユネスコ／日本ESD賞

当賞は日本政府の財政支援で創設された。日本からはユネスコに3件推薦し、本年は岡山ESD推進協議会が受賞に至った。取組が優れていたことは言うまでもないが、事前審査としての国内審査の申請資料を原則として英語にしたことが、日本が受賞できた大きな要因の一つと考えている。英語で書くのは大変だが、どのように書けばユネスコにアピールできるかを最初から国内で審査できたことが勝因につながった。グローバル化が進む中で、英語で表現していくことは避けられない。今後も審査などにおいて英語化が求められると思うので、ご理解をお願いしたい。

◆ESD推進の手引

本手引は、あくまでも初版であり完成版ではなく、今後どのようにリバイスまたは第2弾を作っていくべきかを検討している。複数の都道府県で研修を行い、先生方からご意見を頂戴している。SDGsも今後しっかり実施していかなければならない。そうした状況も踏まえ、どのような形で作っていくべきかを引き続き検討していきたい。ご意見があれば是非頂戴したい。



【ユネスコスクール加盟申請手続について】

ユネスコスクール数が伸びている一方で、現在加盟申請中の学校については加盟承認されない状態が1年以上続いている。申請中の学校も、すでに加盟承認されている学校と同様に活動し、さまざまなネットワークにご参画いただき、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）やコンソーシアムなどと共に活動の充実を図っていただきたいと考えている。

ユネスコには日本のみならず他国からも申請が多数寄せられており、諸事情で予算が枯渇しているユネスコは対応に苦慮している状況にある。ユネスコスクール認定の3割が10ヶ国に集中（内1割が日本）している現状に対して、監査から、国際機関なので地理的バランスの観点から国ごとに上限を求めているかどうか、メンバーシップに明確な期限やフォローアップを義務づけるべきではないか、事前にしっかり選考すべきではないか、などの指摘を受けており、加盟承認を止めて、制度全体の検討を行っているところ、とのことである。

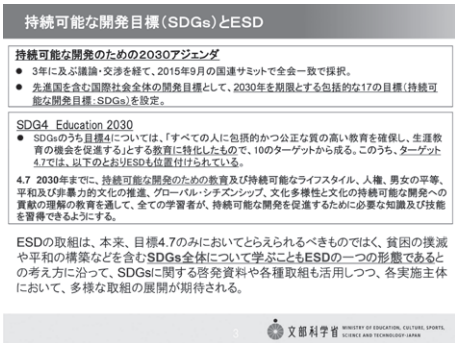
11月に一部の国と本部で対応を協議した。ユネスコスクールの活動を、よりタイムリーに効果的に発信・フォローしていくという観点から、OTA（Online Tool for ASPnet）の利用を推奨していくことになり、加盟承認に際してもOTAを使用するよう変更することになっている。すでにシステム運用は始まっているようだが、まだこれを活用して加盟承認が進んでいるわけではなく、他国でもこれをどう使うか検討している。

国ごとの上限については、ユネスコとしては考えていないようだが、申請があったらすぐ承認するのではなく、活動を適切に行うポテンシャルがあるかという点について期間をおいてチェックし、活動を見守る期間を考えて欲しいという話があった。この方針は、ユネスコとしての明確な決定には未だ至っていない。

日本は最大のユネスコスクール校数があるので、然るべき対応を検討する必要がある。さまざまな形で検討を進めていくが、当面は整理する必要がある、新規の申請は保留になる。すでに申請されているものを優先していきたい。

【持続可能な開発目標（SDGs）について】

ESDの中でSDGsをどう生かしていくのかを引き続き検討していきたい。すでに現場で実践されていると思うが、私どもとしても学校の取組を支援していく方法を考えていきたい。



以上、今後の手続に関することなど、引き続きご意見を頂戴したくお願いしたい。

パネルディスカッション

「つなぐー全国へ、世界へ、そして次世代へ、未来へ」

コーディネーター：及川 幸彦
(東京大学海洋アライアンス機構主幹研究員、日本ユネスコ国内委員会委員)

本日は、大会テーマ「つなぐー全国へ、世界へ、そして次世代へ、未来へ」と同じテーマでパネルディスカッションを進めていきたい。会場には、ESDに長年取り組まれている方々、あるいはこれから取り組みたいという方々にお集りいただいていると思うが、これからご発表いただく二つの優良事例を基に、このテーマに迫っていききたい。「つなぐ」には、「全国へ、世界へ」という空間的軸と「次世代へ、未来へ」という時間的軸の二つがある。この時間と空間を縦糸横糸にしてESDを日々進めておられ、今後に進められることと思う。「つなぐ」というよりむしろ「紡ぐ」と言った方がいいのかもしれない。

これからパネリストの先生お二人にご発表いただく。会場には学校の先生が多いと思うので、学校のネットワークの話から学校を超えて地域の話に進めていきたい。二つの実践報告から、自分がどの立ち位置にいるのかをご確認いただき、それを今後どういう方向でどう広げていくのか、どういう方向性で未来に進めていくのかを、皆で考える場になれば良いと思う。

【パネリスト】

望月 浩明（神奈川県立有馬高等学校教諭、神奈川県ユネスコスクール連絡協議会事務局長）

鈴木 克徳（金沢大学国際基幹教育院教授、北陸ESD推進コンソーシアム事務局）

1. パネリストによる発表

1) 望月先生からの実践報告

神奈川県はユネスコスクール9校ほどで活動しており、小規模だが神奈川県らしい特色もあるので、その点を紹介したい。神奈川のネットワークを紹介する前に、かつて神奈川で行われていたユネスコ協同学校と、全国高校ユネスコ研究大会について説明したい。この2つがネットワークづくりの大きな参考になると思っている。

ユネスコ協同学校というのは1953年にユネスコが始めたパイロット的な研究校で、主な学習テーマとしては、国連のシステム、人権民主主義と寛容、異文化理解と環境問題などで、今日のESDの学習と共通するところもあった。神奈川で協同学校のメンバーになっていたのが川崎市立田島中学校だった。川崎市は



在日韓国・朝鮮人が多く住んでいた地域で、当時そういった地域の差別・偏見をなくすための教育プログラムを作り実験的に行っていた。非常に意欲的で素晴らしい取組だったが、後に協同学校としての活動は衰退し、現在では知っている先生もほとんどいなくなってしまった。協同学校が衰退したポイントには、適切な教師用・生徒用教材の不足、相互交流がうまく図れなかったこと、担当する各学校の校長や教員の転任や退職によりその後の活動が大きく左右されたことなどが挙げられている。そういった意味でも、ネットワークを形成し、教員や他の学校と協力することの大切さが分かると思う。

もう一つ例を挙げたい。1992年に全国高校ユネスコ研究大会が横浜で開催された。全国63校から222名の高校生が集まり、3泊4日で多文化共生、識字教育、環境などの分科会を作り、実際に夜間中学校や福祉施設を訪れフィールドワークなどを行い、最終日には成果を報告し合った。企画運営についても高校生が活躍した。この研究大会は、各地から集まった高校の先生が結成した全国高校ユネスコ指導者協議会、日本ユネスコ協会連盟、地元のユネスコ協会などが運営し、1952年の第1回から2006年の第52回の沖縄大会まで約半世紀に渡り続いたが、52大会で終了し、現在は休止している。その理由には、中心になっていた先生の転任や退職など、教員・スタッフの確保や予算工面の難しさが挙げられる。現在、多くの先生から続行の希望を受け、復活に向けて努力している。

そうした反省からネットワークづくりの必要性を感じ、第5回ユネスコスクール全国大会の時に神奈川の先生たちからネットワークづくりの話が出て、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet)も含み、緩やかな集まりが生まれた。そして、緩やかな集まりの中からユネスコセミナーをやってみようということになり、2013年8月、第1回神奈川県ユネスコスクールセミナーを横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校で開催することとなった。地元の鎌倉ユネスコ協会に共催いただき、1回目であることから、主に講演と各校の情報交換を行った。第2回は私が勤務する有馬高校で開催した。ユネスコスクールの中に国際協働学習をどう取り入れたら良いかという視点を含め、分科会に分かれて自由に意見を述べ合った。

セミナーを開催するにあたり、手続上、会則が必要となり協議会をつくることになった。情報や体験を分かち合い、持続可能な社会の実現に向けて新しい教育内容や手法の開発・研究・実践を進めることを主な目的に、神奈川県のユネスコスクール連絡協議会が正式に発足した。2015年には名称を神奈川県ユネスコスクールセミナーから、ユネスコスクール神奈川県大会に変え大会を開催することとなった。

そして2015年、第1回ユネスコスクール神奈川県大会を横浜市立幸ヶ谷小学校で開催した。当小学校は地域と密接に連携し、地域と共同で防災学習を行ったり、地域の方に学校に来てもらい生徒と活動するなど地域社会に開かれた学校、ホールスクールアプローチの実践という形をとっている。このような開催校の独自性や特色を生かす形で大会は行われている。今年度は横浜シュタイナー学園で第2回大会を開催した。当学園はシュタイナー教育を実践する学校で、教科書を使わず生徒が自主的に勉強している。大会にはシュタイナー教育を実践するマーティン・ローソン先生を招き講演いただいた。同氏は、農村実習から戻った生徒の著しい内的発達など体験学習の大切さを講演し、横浜校の方針にも合致する内容であり、これも素晴らしい大会となった。

同時に、ASPUnivNetの東海大学にご協力いただき、昨年には、県内の高校や大学、外国の方が勉強している学校を集めて「UNESCO/ESD交流セミナー 2015～未来の学校について考えてみよう～」を開催し、

高校生と大学生と一緒にさまざまなプログラムを体験した。2016年7月にも有馬高校、ユネスコスクールや加盟を検討している学校、県内にある外国の子供が学んでいる学校にご参加いただき、大学生も含め、多文化共生という形で2日に渡りプログラムを実施した。こうした形でさまざまな試みを実施しているが、やはりネットワークは非常に大切だと感じている。特に神奈川県は、教員や学校が主体となりプログラムを進めていく形をとっており、これが長続きする秘訣ではないかと考えている。もちろん、そこに教育委員会からサポートが得られれば、さらに持続可能な活動ができるのではないかと考えている。

課題は、ユネスコスクールで尽力された先生が、転任後・退職後にノウハウを生かす場所をどこかで確保する必要があるという点である。先生がいなくなるとユネスコスクールが衰退するのでは持続可能な形ではないため、そうしたシステムや方策を考えていく必要を感じている。

もう一つは、活動の主体は児童・生徒であるという点。彼らが恒常的・持続的に活動できるシステムが重要である。例えば、高校の場合はクラブ活動的なもので生徒の活動の場を確保する。そうした形ができれば先生が異動しても、生徒の活動が続けば活動自体も続いていく。今回のテーマ「つなぐ」からも、こうした点を考えていかなければならないと思った。

2) 鈴木先生からの実践報告

文部科学省グローバル人材育成に向けたESD推進事業の補助を受け、3年前に北陸ESD推進コンソーシアムを立ち上げた。

北陸でESDを進めていこうと努力を始めたのは2007年に遡る。当初、北陸ではESDを聞いたこともないという学校が多かったので、まずESDを知ってもらうことを中心に考えた。先生方にESDについて知ってもらうことから出発し、ESD実践校の拡大と学校におけるESDの質の向上を目指してきたが、最近では学校の中のESDに留まらず、学校と地域が一体になり、どうやったら地域がより元気になるかという試みへ徐々に発展させられたら良いと考えている。

北陸では学校を起点に、より幅広く取り組んでいくためにコンソーシアムを進めている。サブタイトルは「北陸における知の拠点形成」。各学校が校内だけで頑張ろうとしても大変なこともあるため、それを支えるような知的資源を共有していくことに力を入れ、大学などの支援も重視している。北陸の人口は全国の僅か3%程度だが、狭いながらも地域ごとに違った文化があり、それぞれの個性がある。ESDを進めていく中で、各地域の特性に合わせた対応が重要になると考えた。北陸全体の中で、富山、石川、福井がそれぞれユニットを組み、各地域の特性に合わせた活動を進め、全体として緩やかにつながるように知的なネットワークをデザインしている。代表団体として金沢大学が事務局になっている。

当コンソーシアムの特徴は、多数のESDコーディネーターを配置していることにある。10数名のコーディネーターが活躍しており、これにより各地のESDの実践者が困った時に、顔の見える関係で相談できるシステムの構築に努めてきた。また、多くのステークホルダーを巻き込んだネットワークであるということも特徴である。東北や奈良のコンソーシアムでも同じような特徴があると思うが、学校関係者だけでなく、企業・大学・NGOを巻き込んだネットワークを形成している。

北陸のもう一つの特徴は、大学、教育委員会、地域のユネスコ協会が連携した形でESDを進めてきたと

ころにあると思っている。とくに色々な学校との関わりがある地域のユネスコ協会には、関心のある学校を教えてもらったり、北陸全体でESDを推進しようといった提案や支援をいただくなど、連携には大きなものがあつた。

また、北陸におけるESD推進大学間ネットワークは13大学からなるが、金沢大学だけではなく、こうした大学によって知的資源を共有し、支援体制を整備していることも特徴である。主な活動としては、国内外のユネスコスクールなどとの交流の推進、ユネスコスクールとその他学校でのESD活動の支援（研修会やシンポジウムの開催等含む）、さまざまな社会教育施設や青少年教育施設などとの連携などを一緒に進めている。

また、コンソーシアム活動の成果発表も行ってきた。参加メンバーは、マルチステークホルダーを心がけ、北陸3県における教育委員会、大学、NGO、ユネスコスクール、企業、と当初は40団体程度だったが、現在は団体と個人を含め130余りに広がっている。もっと広げなければと思っている。

当コンソーシアムでは多数のコーディネーターを配置し、多くの先生がボランティアに近い形で頑張っているが、大学関係者、学校教育に造形の深い教育関係者、ユネスコ協会関係者も多数に及ぶ。それぞれの地域に立脚した、多くの方々によりきめ細かな支援ができるようなシステム、なるべく地域全体で助けるシステムをつくろうというのも特徴である。また、皆に知ってもらい情報共有することが重要であるため、ウェブサイトを構築して情報の共有を図り、さらにロゴマーク作成などによってもコンソーシアムの周知を図っている。

背景となる活動としては、例えば2008年から継続的に地球環境基金の支援を得て、幅広くESDに関連する活動を展開している。また、日本／ユネスコパートナーシップ事業の支援を得て、地域間交流や東海・北陸の交流を進めたり、北陸13大学の連携、支援体制の整備なども進めている。

最後になるが、当コンソーシアムのさまざまな活動の一つとして、単独の学校では難しい場合もある国際交流（台湾の小学校への支援やタイの学校との交流）を進めてきたことを紹介したい。国際交流は成果がすぐに出るものではないが、人と人との関係が非常に重要なので、ある程度時間をかけながら進めていけたら良いと考えている。

2. コーディネーターからパネリストへの質問

両氏の立場や背景、最初のきっかけは異なるが、ここから多くを学べるのではないかと思いますので、会場の皆さんと学びを深めていきたい。まず、私の方から確認も含め質問させていただきたい。

1) 望月先生への質問

ユネスコスクール連絡協議会は、先生方からの自発的イニシアチブで生まれたと捉えて良いか？

◆望月：

私と横浜市立永田台小学校の住田昌治校長や同校の先生が最初に相談し、そこから声をかけていった。

コーディネーター：

そこが画期的で素晴らしい部分だと思う。そういうことが可能だという実現可能性を形として見せてくれている。

連絡協議会はネットワークがさらに広がり活動が充実していると思うが、つながることで先生の意識や子供たちの学びなどがどう変わったのか、効果やメリットで特徴的なことがあればご紹介いただきたい。

◆望月：

それぞれの学校がメーリングリストを作り、先生方がさまざまな情報を交換している。オンラインのストレージサービスなどを利用して、各校の研究成果や報告書、セミナーの報告などをストックし、誰もがアクセスして共有できるようなシステムができるようになれば良い。高校生にとっても、小学校や中学校で実施されているユネスコスクール活動を勉強することは、得るものがあると思う。

コーディネーター：

簡単に言えば、日常的な情報も共有できる体制があることで、取組が孤立せず、つながってできるというメリットがあるし、先生方も学び合えるということだと思う。

2) 鈴木先生への質問

作り込みの凄さに感心している。色々な団体がつながり、県教育委員会ともつながり、多くの大学を巻き込んでいる。さらにその中で現場とのつなぎ役として色々な背景・専門性をもったコーディネーターを配置していることが先進的だと感心するが、一朝一夕にはできないと思う。異なる文化や地域の方々をどうつなぐのか。戦略的なことがあればお聞かせいただきたい。

◆鈴木：

色々な人を巻き込むのは、実は私がやっているわけではない。協力いただいている方々が色々な人を紹介してくれる。例えば、県教育委員会を動かすのは大変だが、教育委員の方々を通じて話をしていく中で、県教育委員会の理解も広がっていく。私が行くだけでは動いてくれないが、教育委員の方々が協力くださる中で輪が広がっていくと思う。また北陸の場合、ユネスコ協会の方々に強力にご支援いただいた。協会には企業関係や教員出身の方々、教育委員の経験者もあり、そうした方々のご支援により北陸コンソーシアムがこれだけ大きく広がったと思う。

コーディネーター：

鈴木先生がキーパーソンであることに異論はないと思うが、先生がさらに周りの方に働きかけ、その方を通じてまた広がっていく。間にどういった人材を通すかにネゴシエーションの大きなコツがあるとお話いただいた。地方のユネスコ協会のリソースをうまく活用することも、地域とつながる重要なポイントだと思う。皆さんの学校でも、地域にユネスコ協会があれば、ぜひ声をかけてみていただきたい。

3. 会場からパネリストへの質問

質問1) 初期のユネスコスクール衰退の要因として、教員の転任や退職でユネスコスクールのイニシアチブを維持できなくなることが挙げられていた。先生が異動した際、その学校がESD推進拠点としての活動を維持し、さらに展開していく上で、こういった方策が効果的だと思えるか。

◆望月：

それを一緒に考えたいと思っていた。もちろん、学校現場、教育委員会、地域の団体でも学校と長い付き合いがあり一緒に活動してくれれば、先生が変わっても対応できると思う。学校の中でも、例えば組織の中にユネスコスクール担当などを置き、それを継続していく。生徒自身がユネスコクラブ的なものをつくり活動を継続していく。そうした仕組みをうまく作れば、先生が変わっても、次の先生や地域がサポートしてくれたり、生徒が動いてくれるという可能性が出てくると思う。皆さんも色々なアイデアをお持ちだと思うので、アイデアを結集することで持続可能なユネスコスクールづくりができてくるのではないかな。

◆鈴木：

環境教育の世界でも、人が変わると衰退するという状況が頻発した。これにどう対処すべきか、ESDを進めている時に考えたことがあった。一つは地域を巻き込むべきだということ。地域を巻き込んで進めれば、先生が変わっても地域がバックアップしてくれることで継続する。むしろ地域の人たちが先生を教育してくれる。教育委員会が頑張ってくれて、つないでくれることもある。福井県勝山市が極端な例で、市内の全小中学校がユネスコスクールであるため、どこの学校に異動してもやらなければならないという戦略をとっている。また、先生が変わって活動が衰えた学校に対して、コンソーシアムのメンバーがこういった形で重点的に支援できるのかを考えている。支援体制を整備することも一つの方法だと思っている。

大学でも異動はあるので、大学間ネットワークを作り、関係する先生にメンバーになっていただき、徐々に体制を強化していくというやり方も必要だ。大学間ネットワークを作ることで、互いに支え合えると思う。大学の場合は一般に比べ任期は比較的長いですが、それでもそうした危機はあるので、大学間で連携することで克服できるのではないかな。

コーディネーター：

簡単に整理すると、一つは「地域」がキーワード。先生が変わっても地域はそう変わらない。地域にESDの精神やネットワークが引き継がれていれば、先生が変わっても学校を支え、活動の持続可能性を担保してくれるサポーターになってくれる。だからこそ、ホールスクールアプローチという観点が入っている。一個人の属人的な取組では、その先生がいなくなれば衰退してしまう。教科でない学際的な教育は全てその轍を踏んできた。ESDというホリスティックなアプローチで組織的な校内体制も整え、さらに地域と一緒にやるということが必要だ。

もう一つのポイントは教育行政的な部分。町や市を挙げてESDを推進することは、全ての地域ではできないだろうが目指すべきものである。またカリキュラムをきちんと作り、受け継いでいくということ。中身がないシステムでは金属疲労を起こす。中身をどう作っていくか。校長会でも継続継承がいかに大切かがよく言われた。自分に続く人材をつくる、次世代につなぐためには受け継ぐ人材をどう育てるのかもESDの大きなテーマである。皆さんは一生懸命やっているが、それを受け継ぐ人材をどう育てるのか。今の話から膨らませて考えていただければと思う。

質問2) SDGsのゴールを使うことで、ユネスコスクールを拠点にし、地域にESDを効果的に広げていくことができるか。お考えがあれば教えていただきたい。大学関係については鈴木先生、地域のことについては望月先生に質問したい。

◆鈴木：

私は、SDGsはそれほど分かりやすすくないと思っている。前身のミレニアム開発目標は8つのゴールと21のターゲットだったが、SDGsは17のゴールと169のターゲットと数が増えた。作成したジェフリー・サックス氏に質問したところ、全てを取り込んだ結果の妥協の産物とのことだった。このターゲット全てを実施することは、どここの団体組織でもできないと思う。従って最も大切なことは、この中から自分の地域と密接に関わることは何かを特定することではないか。例えば、都市部のある地域であれば持続可能な生産消費が重要であろう。その他の課題については、SDGsの最大の課題である格差をなくす（「誰ひとり取り残さない」）という基本理念に従いながら、うちの地域ではこれをやる必要があるということを地域の中で言っていくプロセスが非常に重要ではないか。そのために大学もお手伝いできると良いと思う。

コーディネーター：

むしろ積極的にゴールを選択していくということ。私の学校ではどのゴールを優先的にやっていくのか、企業団体であれば、どのゴールだったら貢献できるのかを考えていく。皆で力を合わせ、トータルとして17のゴールを達成できるという形で日本が進んでいければ良い。

◆望月：

17全ての理解は難しいのではないかな。学校で教育する中に17のエッセンスが入っていても、先生方に浸透していなければ、宝の持ちぐされである。先生方にも「自分はこれに関わる授業をしている」ということを意識してもらえば、「これについて地域のユネスコ協会と一緒にやっていこう」ということもできる。例えば、私たちの学校では、地元の方が主催する地域の外国人を招く料理教室があり、生徒が参加することで異文化や食べ物について勉強することができる。各先生が考えて、地域とどのゴールがマッチングするかを考えてやっていけば良いと思う。

コーディネーター：

このSDGsをすべて、一つの団体や地域でやるのは難しいものがある。確かに、以前から無意識に取り組んでいる先生も多いと思う。SDGsの視点から自分の取組を見直し、自分の取組がこういうことに貢献できているという前向きな捉え方で、評価することがあって良いのではないかな。自分がやっている取組が17のどこにつながっているのかを考えていただきたい。SDGsはグローバルなので、地域に根ざした活動が、世界規模の持続可能な社会の実現に貢献していると捉えていただく。ユネスコにも、そういうことで評価して欲しいと注文したい。

同時に、それが方向性だとすれば、もう一つ、グローバル・アクション・プログラム（GAP）の5つの行動優先分野がある。自分の学校や組織・団体が、どの分野で取組を行っているのか。例えば、横軸にSDGs、縦軸にGAPを置いた時に、自分が今どの位置にいて、どういう取組でESDを推進し、地域に貢献し、世界に発信・貢献できるのかを見直すちょうど良い機会と捉えられる。

4. コーディネーターによる総括

示唆に溢れる素晴らしい実践に感謝し、感じたことを皆さんと共有したい。

1つ目は「つながる」という今回の大きなテーマについて。SDGsの最後（17番目）のゴールはグローバル・パートナーシップの活性化であり、まさしく今日の大会テーマである。その2030アジェンダにもパートナーシップが明記されている。そういう意味でもタイムリーなテーマだったと思う。

ただ、大事なのは「つながって何をするのか」ということ。必要性和達成感のあるネットワークを意識する。つながること自体が目的ではなく、目的を達成するためにつながる。例えば、神奈川県はユネスコスクールのテーマである学び合いを復活するためにつながっているわけだし、北陸も地域それぞれの課題などにどう向き合って地域を元気にするかという課題に取り組むためにコンソーシアムをつくっている。そうしたことを常に意識に置くことで、誰とつながったら良いか、どういう仕組みを作ったら良いかが見えてくると思う。

つながり方やネットワークは地域によって違ってくるのは当たり前で、ESDもユネスコスクール活動も学校や地域によって違うし、都市部と地方のESDは違うと強く思うようになった。抱えている課題が違う。国によっても違う。だからESDでは多様性が非常に重要になる。違うからこそ、つながって学び合うことが重要だと思う。地域同士がつながるということにはそういう部分があるので、このコンソーシアムやユネスコスクール連絡協議会と、また全国でつながり、輪が広がることで日本のESDの底力や充実が図られると思った。

本日は学校が自主的につながる例や、大学が中心となりコンソーシアムという形でつながる例を見てきたが、その他にも全国には教育委員会がリーダーシップをとって地域内をつなげる例も見られ、これも一つの手法として効果的だと思う。そうした行政的なリーダーシップが期待できるところは、そういう形でやっても良いだろう。それから、テーマでつながることがあっても良いと思う。先月、平泉で世界遺産学習全国サミットがあった。全国から集まって先生や生徒が学び合うという「つながり」をすでに6～7回やっている。また、気仙沼では海洋教育こどもサミットがあり、海洋教育という切り口で、東北の子供たちが先生も含め300名程度集まり、共通テーマで学び合った。また、防災、環境、エコパークなどでつながることも可能性としてある。「つながり」を一元的に捉えるのではなく、さまざまなチャンネルアプローチでやっていくことが重要ではないかと思っている。

国内的には、ESDのセカンドステージとして各種施策が打ち出されている。GAPの国内自主計画も3月に策定し、そこにもユネスコスクールの取組、アクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメントに通じる記述がある。そうした点も認知してほしい。また、金沢のようなESDコンソーシアムが全国に13箇所あるので、近くのコンソーシアムと一緒に進めることも考えられる。今年、環境省と文部科学省が連携し、ESD活動支援センターを立ち上げた。来年からは、8ブロックで地方センターが立ち上がる。そうしたところと連絡を取り合って進めることで相乗効果が生まれる。さらに、どうESDに取り組んだら良いか分からない場合には、ESD推進の手引を活用するとか、ネットワークを使うとか、文部科学省や教育委員会に直接連絡するなど、色々なチャンネルがあると思う。来年に向けてESDの学会を立ち上げようという話もあるので、専門家との窓口として学会を使うという手もあるかと思う。そういう情報を持っているかいなかで、ネットワークをつくるにしても自校のESDを推進するにしても、得られるサポートが違ってくる。そうした点を参考に、取り組んでいただけたらと思う。

全国のそれぞれの魅力や個性のある取組の輪が広がることを祈念して、セカンドステージ、サードステージと永遠にESDが持続可能であるように力を合わせていただければと思っている。

テーマ別交流研修会

第1分科会 ESDの浸透、校内連携（幼小）

発表 福岡県北九州市立すがお小学校 主幹教諭 吉田 安孝
司会 狛江市教育委員会 細谷俊太郎

初めに、北九州市立すがお小学校の吉田先生からの実践発表に基づき意見交換を行った。意見交換の中で校内連携のポイントは、①年間指導計画にESDに係る各学年の取組が明確に位置付けられていること、②実践発表にあったように、1年生で麦踏み、2年生では小麦の収穫・製粉というように、2年間を見通した学習計画としていることの2点に集約された。

続いて、校内連携について参加者の実践に基づいた意見交換を行った。小学校では、学年を超えての連携はできていないことが多い。しかしながら、すがお小学校の例のように、学年が連携した学習活動を年間指導計画に明確に位置付けることで校内連携が可能となり、教員の異動があっても取組の継続が可能となっているのではないかという意見が出された。一方、あまりに年間指導計画が固まりすぎると不自由な計画となり、教師や子供の主体性が生かしづらくなるのではないかと意見もあり、バランスが大切であるとのまとめとなった。



第2分科会 ESDの浸透、校内連携（中高）

発表 宮城県仙台二華高等学校 教諭 石森 広美
司会 北陸 ESD 推進コーディネーター 今井 和愛

事例発表及びその質疑応答後、「どうしたら、校内の教員にESDを浸透できるか」というテーマで6人グループになって、各学校のESDの浸透状況と具体的な課題およびその解決策について話し合いました。

さまざまな校種やESD活動の履歴をもつ先生が活発な協議をしました。最後に、7つの各グループが協議内容を発表し合い、全体の共有をしてまとめました。

発表された内容・解決策は、次のようにまとめました。①本音が言い合えるコミュニケーションの場をつくる必要がある。②ESDカレンダー・計画をみんなで作り、活動や人のつながりが見える化することが大事である。③これらの2つの作業によって、「やらされている」から「自分たちが創っている」という意識の変革が起こる。この意識変革の作業によって、ESDを校内の教員に浸透できるとなりました。この作業が自発的に自分たちの指導要領を創っている気持ちをつくります。



第3分科会 地域連携（幼小）

発表 石川県金沢市立大野町小学校 教諭 永井 重輝
司会 石川県金沢市立新堅町小学校 教頭 河村 真吾

金沢市立大野町小学校の実践発表のタイトルにある「本物との出会い」をキーワードに、持続発展可能な社会の担い手づくりについて協議した。

まず地域の魅力的な題材・人材を発掘する難しさが挙げられ、自然の家の方から一つの方法として「音探し」が紹介された。音はどの地域にもあり、良い音ばかりだけでなく騒音などの悪い音もある。地域をじっくりと観察する機会になると説明いただいた。

また実践の継続によってマンネリ化しないように、毎年、児童の思いを把握し学習計画を作る必要があるという意見が出た。協議を通して、導入に「本物との出会い」を位置付け、児童が人や物と直接触れることで地域の事象の価値に気づき学習意欲が高まること、さらに追求過程ではプラス面だけでなくマイナス面にも出会うことで思考が深まることなどが共有できた。

限られた時間ではあったが、大野町小学校の貴重な実践に活発な意見が集まり協議が深まった。



第4分科会 地域連携（中高）

発表 奈良県奈良市立二名中学校 教頭 江村 圭造
司会 多摩市教育委員会 教育部参事 神山 直子

地域連携をテーマとし、奈良市立二名中学校の発表を基に、全国各地の実践を交流した。

ESDの学習の対象は、「奈良の大仏」や「知床の自然」など世界的な規模のものあれば、地域の経済を支える「地元企業」、地域の大人なら誰もが行ったことがある「カツカレーが評判の食堂」もある。優れた実践に共通するのは、子供たちが社会の一員として地域の魅力に気づき、それを継承・発展・発信しようと学び続けていることにある。発信する相手が外国の方であれば、子供たちは当然のように英会話にもチャレンジしていく。

校種を問わず、PTAの方々に教育活動に参加してもらえるよう働き掛けることはもちろんのこと、コーディネーター等の力をお借りして、互いの名前を呼び合えるように関係性を築いていきたい。予算の有無に影響されない人と人とのつながりを構築し、子供たちの確かな学びを支え、成長の喜びを分かちあっていきたい。



第5分科会 教科とのリンク

発表 東京都立杉並総合高等学校 教諭 藤野 明彦
司会 金沢大学 教授 松田 淑子

藤野明彦先生の実践報告に基づき、4～5人のグループに分かれそれぞれテーマを焦点化して語り合い、最後に全体で共有しました。

全体会では、例えば、小学校の先生方から、藤野先生の高校での実践と生徒たちの積極的な様子を伺い、小学校でのESDの学びの種まきがやがて中学、高校で開花していくという学びのつながりを知ることができ安心したことが挙げられました。

また「ESDって何だろう？」という一つのグループからの問いを全体に拡げ考え合ったりもしました。その中で、子供たちが世界の課題に対し自分事として当事者意識をもって取り組むこと、そして教師は何か目新しい答えを出すのではなく、自身のこれまでの実践をESDの視点で捉えなおしてみることなどが挙げられました。

藤野先生の貴重な実践報告に誘発され、校種などの異なる者同士がESDを基軸として考え学び合うということを経験し、その重要性を実感し、確認し合うことができた有意義な分科会となりました。



第6分科会 学校間交流

発表 東京都江東区立八名川小学校 教諭 堀内 貴子
東京都江東区立八名川小学校 教諭 小野瀬悠里
司会 金沢大学 教授 松本 謙一

研究テーマ「学校間交流」のもと、江東区立八名川小学校小野瀬悠里先生・堀内貴子先生の教師間・子供間における交流を通しての提案を受け、協議を行った。

グループ・全体討議を通して確認できたことは以下の4点に集約できる。

- ① 異校種・海外との交流を含め、交流を行うことは、子供の育ちのみならず教師の成長においても、大きな学びが期待できる。
- ② 交流を実践する上で最も大切なのは、本気で取り組みもうとする教師の存在である。確かな子供の育ちを実感できた教師は、価値を自覚し、さらなる実践につなげることができる。
- ③ 子供の確かな学びを保障する上で、教師同士が目標を明確に共有するだけでなく、何を教師が決めて、どこまで子供にゆだねるかといった、いわゆる緻密な単元構想が欠かせない。
- ④ 交流の場を設定する上で、学校を支えるさまざまな組織や機関とのつながりが欠かせない。誰もが交流できる環境の構築が望まれる。



基調提案を中核に据え、参加者の積極的な意見交換・実践報告を通して、全国のいろんなところで、いろんな立場の方々が、子供の成長を求めて取り組んでいることを感じ、多くの仲間の存在から元気をいただいたのが1番大きな収穫であった。

第7分科会 企業・NPO等との連携

発表 愛知県立愛知商業高等学校 教諭 片山 峰高
司会 中部大学 教授 宮川 秀俊

第7分科会には、企業、NPO、NGO、学校教育に係わる方が約30名集まり、「企業・NPO等との連携」というテーマで、ここでの課題とその課題の解決に向けての活発な意見交換が行われました。企業、NPO、NGOの方は、各々が有する所産を、ESD活動を通して、地域の学校と係わりたいことを強く述べられました。また、学校の先生方は、企業やNPO、NGOの方と係わりを、学校教育の効果的な展開と充実のために、いろんな面から、広く、深く持ちたいことを話されました。

しかし、両者ともに、具体的にどのような内容と方法で、また、手続きでESDとしてつながるかの情報が十分でないことが、大きな課題として明らかになりました。今後は、そのための組織、人材などを生かした情報の取得ならびに情報の流通の支援と、その場の提供が必要と感じました。この分科会には、各校種の教師、教育委員会の職員、地理的には東北から九州まで参加されており、さまざまな情報の交換ができて大変有意義な場となり、今後のESD活動の取組への示唆が得られたと思います。



第8分科会 グローバル人材の育成とESD

発表 名古屋国際中学校・高等学校 教諭 内藤 圭祐
司会 宮城教育大学附属国際理解教育研究センター 教授 市瀬 智紀

本分科会では、「ESDマインドを持った国際人の育成に向けて」と題して、名古屋国際中学校・高等学校の内藤圭祐先生から実践事例の提供をいただいた。

その後、グローバル人材とは何か、学校全体でグローバル化に取り組むにはどうしたらよいか、グローバル化のためのリソースとは何か、課題解決型の学習を進めるにはどうしたらよいのかについて4つのグループに分かれて意見交換を行った。議論の中では、グローバル人材とは「世界で何が起こっているかわかる人」「地球的課題について考えられる人」である。始めから教科を越えて教員全体が協働できるようなカリキュラムやプロジェクトを設定する必要がある、国際交流をベースとした協働学習を設定することが重要である、評価のばらつきがないようにルーブリックの評価をしっかりと作っておくべきである、といった意見が出された。分科会には小中高等学校、大学、特別支援学校教員など47名が参加した。



第9分科会 ESDの評価

発表 東京都多摩市立東愛宕中学校 校長 千葉 正法
司会 東京都江東区立八名川小学校 校長 手島 利夫

多摩市立東愛宕中学校の千葉正法校長先生より、実践を踏まえたご提案がありました。

1. 「ESDは知識経済や国際競争を勝ち抜く人材の育成を目指す学習ではない」という大前提のもと、生徒の成長を第一としながらも、学習評価もホールスクールの視点で取り組んでいること
 2. その結果、『地域に貢献したい子』が全国平均の2倍にまで育っていること
 3. 生徒の行動力や実践力を重視する時、参加度を高めることが重要だが、同時に、学校教育そのものの充実や地域への貢献度も重視しながら連携を進めていること
- などが報告されました。協議では、1. 自己評価や他者（相互）評価 2. 教員の指導や成長に関する評価 3. 地域からの評価 4. SDGsの視点から学校としてのESDの進捗状況に関する評価等も大切ではないかという話が出されました。

「評価」という一言でも、ESDの何に対する評価なのか、レベルの違いを混同しないように分けながら、それぞれの課題を明らかにして、成果を共有していくことが重要とまとまりました。



第10分科会 ESDの目標（SDGs、GAP、岡山宣言など）への対応

発表 東京都大田区立大森第六中学校 指導教諭 柴崎 裕子
司会 岡山大学 教授 住野 好久

2014年に「ESDの10年」が終わり、ESDが目指すべき目標は「ユネスコスクール岡山宣言」「グローバル・アクション・プログラム」で求められている目標に、そして、「持続可能な開発目標（SDGs）」で示されているより広範な目標に方向付けられるようになった。ユネスコスクールにおけるESDは、子供たちに「育みたい資質・能力」を育成するだけでなく、これらに示された目標の達成に貢献することが求められるようになった。

本分科会では、大田区立大森第六中学校の実践を検討することを通して、「未来像を予測して思考する力」や「異質な他者の存在を前提にしてコミュニケーションする力」など、より今日的なESDの目標を、価値的な部分も含めて具体的に設定すること、これらの目標の到達度をルーブリックを作成して評価し、その状況に基づいてカリキュラム・マネジメントしていくことの重要性を共有した。

また、ユネスコスクールにおけるESDは、子供たちだけではなく、教師も持続可能な社会づくりの担い手に育て、学校を地域の持続可能な社会づくりの担い手にし、地域を持続可能な地球づくりの担い手にしていくというビジョンのもと、広い視野と幅広い連携をもって目標を設定して取り組む必要があることが協議された。



第11分科会 教育委員会との連携・取組

発表 愛知県豊橋市立章南中学校 校長 山本 武志
司会 金沢大学 准教授 加藤 隆弘

学校と教育委員会、ユネスコ協会等地域諸団体が連携してESDに取り組むために、各地の取組と課題について情報交換し、効果的に推進するための方策を探った。

豊橋、富山等のユネスコ協会から、教育委員会に対して1) 持続可能な形での（地域諸団体を巻き込んだ）学校支援体制の構築、2) 学校とユネスコ協会・地域を繋ぐ役割を期待することについての事例紹介がなされた。

金沢、大牟田、岡山、豊橋、東京の各教育委員会関係者からは、取組の質的向上を目指して1) さまざまな形の教員研修の実施や、実践・研究指定校などを設けての推進・先進的实践への支援、2) こどもサミット、実践交流会などの発表・交流機会の確保、3) 柔軟な予算確保、4) ステークホルダーへの働きかけの重要性等について紹介、提案があった。

実践校・教員からは、取組を立ち上げる難しさがあり、1) 見通しを持つための情報や取組への価値付けなどより実質的な支援・助言、2) 地域諸団体との橋渡し、などの要望が出された。

学校と教育委員会、地域が手を取り合って持続発展可能な子供たちを育てることの大切さを改めて確認した。



第12分科会 学習指導要領とESD

発表 石川県金沢市立三馬小学校 教諭 田中 哲也
司会 石川県金沢市立泉野小学校 教頭 山岸 朋子

～単元のねらいを明確にした意図的・計画的な単元設計の大切さ～

本実践では、子供の学びの連続性が評価された。深い学びのためには、教師が単元を通して子供に付けたい力（ねらい）を明確にし、子供の思いを生かしながら地域と結びつける場や多様な視点から討論する場を設定する等、単元設計の工夫や丁寧な準備が大切であることが再確認された。

～学びを生活や社会とつなげるための課題～

一方、学びを生活や社会とつなげることが難しいという意見も出された。生活や社会とつなげていくためには、公民館で提案する、同じ素材を扱う学校と交流する等の実現可能な広がり計画・実施することや、「ESDで培う力は1年間ではなく、何年も繰り返し学ぶことで身に付く力」という意識で継続的に取り組む必要がある。学習発表会や掲示等を工夫し、子供自身が学びのつながりをイメージできるようにするとともに、カリキュラムをESDの視点で見直し、複数学年に渡って教科を横断して見通しながら編成していくカリキュラム・マネジメントが重要であることが共通理解された。



中国・韓国のユネスコスクールでの活動事例紹介

本年1月に開催した日中韓教育大臣会合にて、中韓両国のユネスコスクール教員を本大会にお招きした
いと提案が馳前文部科学大臣からあり、両国からも賛同が得られ、本日、両国の先生の招へいが実現した。
これから、それぞれのユネスコスクールの活動内容や課題をご紹介いただく。事例の共有を図り、他国の
活動をより深く知るとともに日本の取組を振り返る機会とし、今後の活動や交流について考えていきたい。

【招へい教員】

中国：北京師範大学附属実験中学
教育調査部長（3年生・中国語担当）李 荔萍

韓国：慶尚南道金海市立石峰初等学校
教諭（4年生担任）チェ・ジョンア



1. 中国の事例紹介

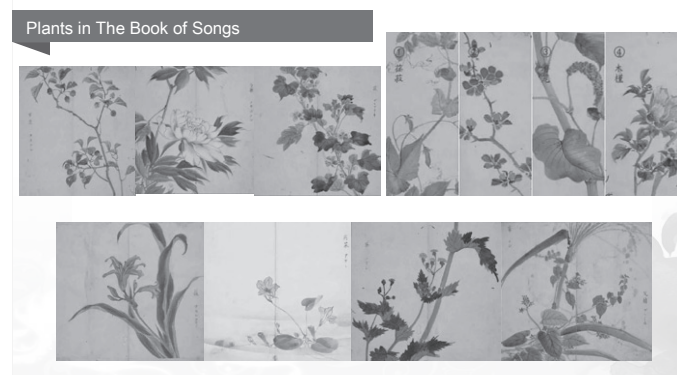
教師は未来を創ることはできないが、選ぶことはできる。私たちはどのような未来のために働き、どのような未来の世代を育てているのだろうか。この複雑かつ不確かで矛盾する環境の中で、この世代はより良い世界をどのように創造していくのだろうか、と私は日々考えている。

ESDは、価値のある教育である。事実、多くの伝統的価値観は持続可能性と関連している。古代中国文化における人間と自然の調和、中庸などの思想は、持続可能な社会の必要性を訴えており、教師はこういう世界のために働く必要がある。しかしいま、伝統的価値観は失われつつあり、私たちはもう一度これらの価値観を再建しなければならない。ESDは、大量消費を賞賛し、急速な経済発展モデルを支持するのではなく、ライフスタイルや価値観に対し新たな視点を取り入れるべく、世界を包括的（グローバル）に捉えている。この意味で、ESDは教育におけるイノベーションであり、教育の本質への回帰でもある。

私たちの学校では、教育資源や新たな発展的資源が絶え間なく溢れる教育分野を作ろうとしている。持続可能性という観点で捉えると、ESDの活動を成功させるためには、これらの教育資源は欠かせない要素と言える。私たちは、生徒が持続可能性の観点で自身の生活や社会についての手がかりを得られるような新たな場を作り出すため、中国の伝統から教育資源を探してきた。

学校の方針は、コースの目的を広げる（複数のローカルコースの革新）、学習経験を豊かにする（生徒の学びに重点を置く）、トレーニングシステムを刷新する（総合力の育成）、教育環境を拡大する（学校の壁を破る）の4点にある。

いくつか事例を紹介したい。まず初めに、詩経とそこに登場する植物について。詩経は中国二大文学の一つで、昔の社会生活やラブストーリー、幸せ、悲しみなどを記録したものであり、その時代の暮らしや魂の芸術表現であり多くの動物や植物（143種の植物、



85種の草、58種の樹木など）が登場する。植物は人々の生活と密接な関係があり、単に人が暮らしていくためだけに必要なものではなくコミュニケーションや感情表現のツールとして使われている。

この詩経を基に、中国語、生物学、芸術、総合技術分野の教師たちが集まり、グループで以下の活動を行っている。1）詩経を読み・詠む、2）詩経の植物で表現される文化的意味や感情表現の研究、3）環境への配慮（地形や水門学、詩経では植皮を本のカバーに使用）、4）人と地球との関係（詩経の農業の歌を詠む）、5）詩経に登場する植物を探す（実際に植物を探し詩経の名前と照らし合わせ）、6）書道、彫刻、切り紙、はんこ作りなどによる詩経に登場する植物の再現

Looking for the Plants in The Book of Songs – Match the Real Plants with the Names in the Book of Songs



詩経は2500年前に実際に起こったことの記録で、文学的創造ではない。詩経を通じた活動により生徒は遠い生活に思いを馳せ、その生活を感じて歴史を分析し、現在について考え、未来に向かうことができる。この活動の目的は世界をつなぐこと。これらの活動は小規模で行われ、ブロックを積み重ねるように自分たちが望むように組み合わせることができる。これは生徒が異なる分野のものをつなぎ合わせるのに役立つ。例えば文学と自然、生活とアート、古代生活と現代生活さえつなぎ合わせることができる。この学びの過程で生徒たちは異なる分野のつながりから知識を得て、実用的で芸術的な力を発展させていくことができる。そしてここで得た新たな知識が彼らの人生に別の意義を与えてくれる。

また、持続可能性という概念を、私たちはどのように学校のカリキュラムに取り入れ、実行できるのか。「ペーパーファッションデザイン～芸術がテクノロジーを変え、文化が世界を変える」について例を挙げる。

ファッションとデザインは、国定カリキュラムでは総合技術として選択科目になるが、世界遺産、無形文化遺産、国の文化をそのまま多彩なファッションの要素として取り入れた。伝統とファッション、歴史と未来を融合し、若い生徒が文化遺産を理解し、デザインを通して伝統を次の世代につなげている。総合技術という科目の目的が、アートによって改善された。そして、ペーパーファッションデザインのコースは、当校の素晴らしいコースの一つとなった。さらに北京教育研究部の支援により、当校は市の教員たちの研修を始めた。このコースは80校以上の中学校に広がり、多くの生徒たちがこのコースから恩恵を受けている。また当校は毎年、世界遺産教育センターとともに地域で若者のための大会を開催しており、多くのペーパーファッションショーをステージで見ることができる。海外に紹介されたものもあり、この中から将来、有名ファッションデザイナーが生まれることを信じている。

Paper-cut Art



私たちは持続可能な教育分野を常に維持できるよう努めている。さまざまな教育資源の中から、生徒たちが選べるように、多様なESDの素材やコンテンツを提供し続けている。ESDの核となる考えは、自分自身の今と未来を考え、そして世界の今と未来を考えることにある。私たちは未来に向けて何をすべきか。ESDが答えを教えてくれる。それは私たちの価値観と精神である。生徒たちは世界を理解し未来と対話する招待状を未来の自分と未来の世界に送っている。

ある女子生徒の話を紹介したい。彼女は中学生の頃から自分のファッションブランドを持つことを夢見ていた。ブラウン大学での専攻は美術史で、東アジアのアートや工芸品を研究した。「チャイナドレスの美しさを伝えたい」と1年間チャイナドレスを着続け、卒業後に自身のブランド「ShiLiuJi」を立ち上げて花柄プリントの服を販売し始めた。彼女の決断が、必ずしも先に例に挙げた2つの教育の成果というわけではないが、6年間もそうした環境で育っていることは事実である。これは、ひとつの種がまかれ、気がつけば若い木に育っていたということである。



ESDで多くの種をまいて、それがいつか若者の心に届くことを願っている。それが自然や社会、人、世界や自分を探るために、とても重要な一歩を踏み出す助けとなるだろう。そしてその種は木となり、最後には広大な森となることだろう。

本大会では、皆様の意見を伺い共有できた。大変貴重な機会をいただいたことに感謝申し上げたい。

2. 韓国の事例紹介

韓国のユネスコスクールにおけるESDの活動事例について紹介したい。石峰初等学校は、韓国で二番目に大きい都市である釜山市の近郊、金海市の開発地区に10年前に設立され、約1,000人の生徒と約70人の先生とスタッフを有する。2014年のユネスコスクール認定以来、さまざまな活動を行い、ユネスコの理念を反映するように教育目標を考案している。また、カリキュラムを発展させるために、平和、人権、異文化交流、環境問題、地域文化などをテーマに選び、先生の助けとなり、生徒のためになるさまざまな教育メソッドを利用している。

「共に生きよう」というテーマのもとでESD学習環境をつくり、興味深いカリキュラムと課外活動の発展につながっている。ESDの活動やクラスの実践においては、人的また物理的な環境とユネスコスクールに関わるネットワークをつくった。ユネスコの教育環境をつくるために、学校の黒板、階段、廊下などをポスター他の教育教材で飾り付け、学校正面にはユネスコ活動に関する写真を展示した。

また、7つの異なるテーマの学習スペースを設けた。例えば、緑を育てる教育では、自然についてもっと学ぶために「虹の森」をテーマに使用し、環境を考え、街灯には太陽エネルギーを利用した。キャンパス内にはバードハウスを作り、野生生物との関わりをもたせ、さらに生徒に農業を体験してもらうために野菜園と小さな田んぼをつくった。

先生の研修では、ユネスコの理念、地球市民教育（GCED）、ESD、国際理解教育（EIU）について学んだ。

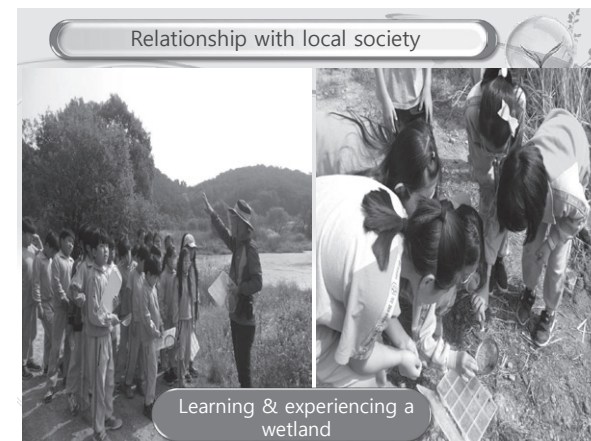
韓国ユネスコ国内委員会のナショナルコーディネーターが我が校を訪れ、「将来の地球市民をつくるためのユネスコの役割」に関する講演をしてくれて、大変有意義なものとなった。

一方、ユネスコと地域社会が密接につながるネットワークをつくった。韓国ユネスコ国内委員会を中心に、慶尚南道（行政区）、統営市RCE（拠点地域）、ESDのリサーチグループ、金海市庁などが、ユネスコネットワークでつながった。地域社会との深いつながりにより、学校の活動もサポートされた。

こうした活動は、生徒にとって気候変動、世界の問題、地球市民について学ぶ良い機会となった。さらに、生徒は環境体験クラスに参加したり、金海市の陶器祭りでは自ら陶芸に挑戦したり、ウポ湿地帯を訪れエコシステムを体験するなどした。

次に、ESDプロジェクトラーニングをどのようにカリキュラムに取り入れたかを紹介したい。ESD活動としては、教師の支援コミュニティをつくった。初めに、教師らは教育方法を考え教材を作成し、次にその指導法を使って生徒を指導し、指導後は問題点や改善点について時間をかけて話し合い検証した。

ESDプロジェクトラーニングの事例について紹介したい。私たちは「平和」「人権」「地域の習慣」「異文化」「環境」について生徒たちを教育してきた。「平和」教育では、コミュニケーションや平等教育、韓国のNGO団体グッドネイバーズやグローバルな人材についてフォーカスした。「人権」というテーマでは、校内暴力、共感、難民や障害をもつ人々たちについて取り上げた。校内暴力を防ぐためのキャンペーンを実施し、共感について考え、生徒は世界の難民問題について学んだ。障害をもつ人やその生活について議論を交わし、ポジティブなメッセージを描いた傘の展示も行った。「環境」に関しては、Riceプロジェクト、水質保全プロジェクト、環境キャンペーン、野菜を育てるクラスなどに力を入れた。生徒たちは環境に優しい方法でお米を育て、学校ではさまざまな有機野菜を育てた。環境キャンペーン後にはランチルームに展示して、他の生徒たちも学べるようにした。「世界水の日」には水を節約するために雨水を集めるなどした。「異文化」教育では、子供たちに異文化を伝えるために国際的な食に関する活動を計画し、日本、中国、ロシアなどのさまざまな文化を研究した。月に一度、昼食に他国の食べ物を食べ、異文化の食を体験し学ぶ機会を提供した。生徒が参加する異文化キャンプも実施した。「地域習慣文化」では、伽耶の歴史、金海市の文化、ジャングルティーについて教育した。生徒は伽耶や金海の歴史、磁器について学び、手作りの陶器づくりに挑戦し、学んだことを発表した。地域名産の甘柿を食べ、ジャングルティーを飲み楽しむ時間も設けた。こうした活動から、生徒は自分たちの文化と歴史に誇りを持ち、金海市に住むことで自分たちの誇りを培ってきた。



The rice project

Four photographs showing students participating in the rice project. The top left photo shows students working in a field. The top right photo shows students holding small plants. The bottom left photo shows students standing in a field. The bottom right photo shows students standing in a field.

ユネスコクラブの活動についても紹介したい。当校をより環境に優しい学校にするためにユネスコクラブを立ち上げ、年間の活動を計画した。若者のためのレインボープロジェクトにも取り組む。ユネスコクラブには4～6年生までの生徒が約30名いる。学校が自然とより共存していくためにRiceプロジェクトを実行し、学校の田んぼで、淡水カタツムリを使ったグリーンファーマーミングメソッドを使いお米を育てた。お米は良く育ち、今秋には収穫予定にある。学校の農園でも多くの穀物を育てた。生徒はレタスを家に持ち帰ったり、私たちがじゃがいもを茹でると、最高！と喜んでいた。じゃがいもは生徒や親、地域コミュニティに販売し、売上げ全てを韓国ユネスコ国内委員会が設立したアフリカ・アジア・ブリッジプログラムに寄付した。また、学校でフリーマーケットを開催し、助けが必要な近隣の方々や、発展途上国の教育サポートプログラムを支援した。生徒たちは、ユネスコのキャンペーンや活動に、慶尚南道のユネスコスクールを含む教育ネットワークを通じて参加した。

ESDプロジェクトを通して、生徒は調和と協力の中で共に生きていくことを学んだ。生徒、親、教員らはこの活動に満足し、ESDの重要性について深い認識をもった。ESDは私たちのコミュニティや世界にとって、欠かせないものである。教員たちがさまざまな教育方法や教材を発展・共有し、このプロジェクトが人々を助けられるものになるよう努力している。生徒たちは健全な環境がどれだけ大切かを学び、教育支援や世界の大きな問題、環境について考えることを学んだ。また、地域コミュニティの素晴らしい支えにより、私たちは生徒とともに多くの活動をすることができた。

この結果は、他校や地域コミュニティに3つの方法で共有された。まず、教育プランや教材をウェブサイトに掲載、次にESD事例をアカデミックセミナーや慶尚南道のユネスコ教育ネットワークのセミナーで紹介し、最後にこれらのユネスコの理念を生徒の両親や地域コミュニティと共有した。

本大会では日本や中国のESD活動を学んただけでなく、皆様の情熱に大変感銘を受けた。本大会にお招きいただいたことに感謝申し上げたい。



3. コメント：及川 幸彦(東京大学海洋アライアンス機構主幹研究員、日本ユネスコ国内委員会委員)

両氏の素晴らしい発表に感謝申し上げたい。北京師範大学は、中国でもいち早くESDに取り組んでいることは以前から存じ上げていたが、経験と実績に裏付けられた魅力的な発表であった。また、韓国のユネスコスクールが質の高い活動をしていることも以前から伺っていたが、とくに慶尚南道の地域ではESDの取組が非常に活発で素晴らしい発表だった。

中国、韓国、日本にはESDの取組の手法について共通する部分と異なる部分がそれぞれあると思う。私が注目したのは共通する部分で、自然と人間との共生や、古代の伝統文化と私たちのライフスタイルの融合など、一言で言えば、人間と自然、人間と文化との調和がキーワードとしてあるのではないかと思った。これは欧州のESDとは若干異なる。自然が人間にとって克服すべき対象というよりは、共に暮らし生きていくということである。今回はそれを強く感じたプレゼンテーションだった。そういう部分でぜひ、日本の取組とこれからも交流していただいて、お互いのラーニングメソッドやアクティビティ、実際の実践事例やご紹介いただいた先生のトレーニングなどを共有していくことが非常に重要だと思った。

今回、両氏にご参加いただき、直接、活動事例をご紹介いただいたことは非常に意義のあることだ。今後も韓国や中国でこうしたセッションがある際には、ぜひ日本からご参加いただきたい。国境を越えて存在する課題については、グローバル・パートナーシップで手を携えていかなければいけないので、そういう視点でアジアらしいESDをつくっていければ良いと思っている。

ネットワーク構築についての報告

住田 昌治（神奈川県横浜市立永田台小学校 校長）

昨年の全国大会では、1,000校にもなろうとするユネスコスクールにおいて、変容をもたらすような質の高い教育をするために、全国のユネスコスクール同士がつながり合い、学び合う全国ネットワークを構築することが共有された。その後について報告したい。

まず、1月に開催された全国ネットワーク会議で、岡山、神奈川、京都、大阪から地域ネットワークに関する報告があった。その報告を受け、全国ネットワークの目標、運営、情報共有の方法など、今後の課題についてグループで和気あいあいと話し合い、地域を越えた学び合いができた。また、地域ネットワークがつくりにくい離島やアクセスが困難な地域の悩みも共有できた。この場では、「地域のネットワークの充実」「(つながりにくい地域もあるので) テーマ別のネットワークの必要性」「子供同士の交流 (の必要性)」、さらに「ASPUnivNetとの連携強化」などの意見を共有した。一方、ESD推進拠点としてのユネスコスクールの役割は認識されてきているが、「そもそもユネスコスクールとは何か？」という問いや、「もともとネットワークだったはずなのに、ここでまたネットワーク構築とはどういう意味なのか？」といった問いが出された。

「ユネスコスクールとは何か？」という問いについては、11月に開催された全国ネットワーク会議で共有されたことを、ここで再度皆さんと確認しておきたい。ユネスコスクールの目的は、「ネットワークの活用による世界中の学校と生徒間・教師間の交流を通じ、情報や体験を分かち合うこと」、「地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発・発展を目指すこと」、そして「ESDの推進拠点であること。」ここがユネスコスクールの“原点”である。

さらに11月の会議では、ユネスコスクールとして今、取り組むべき地球的課題についてワークショップを行い、静岡、北海道、神奈川、大阪、新たにネットワークが構築された東京からも地域ネットワークについて報告があった。ここでも「地域ネットワークの重要性」が確認され、しっかり地域でネットワークをつくっていかうということになった。また、「子供同士の交流、ユースの活用（ユネスコスクールで育った子供たちが教員として戻ってくるという循環が生まれているため）」「ASPUnivNetからのサポート」についても共有した。孤立感や今後の進め方についての悩みも聞かれたが、これらについては「ユネスコスクール同士のサポート」で、声を掛け合い、互いに助け合っていこうということになった。また、「ESD関係団体との連携強化」も確認された。

これまでの全国ネットワーク会議で共有したことには、①から⑧の8項目が挙げられる。中でも、①「ASPnetに加盟した学校がユネスコスクールであり、ユネスコスクールはネットワークの一員である」が大前提になる。②から⑥までは会議の場で共有し、⑦⑧は会議後に共有した。⑦については、全国の仲間が情報共有しつながる場である「ユネスコスクール公式ウェブサイト」へのアクセスが少ないため、まずはアクセスして有効活用してほしいと考えている。また、⑧は世界のユネスコスクールとつながるシステムとして「OTA（Online Tool for ASPnet）」が稼働し始めたということなので、こちらも活用していくことが重要になる。

これまでのネットワーク会議で共有したこと

- ① ASPnet (UNESCO Associated Schools Project Network) に加盟した学校がユネスコスクールであり、ユネスコスクールはネットワークの一員である。
- ② 今年度になってから、新たに地域ネットワークが立ち上げられたり、地域ネットワークの活性化が図られた。
- ③ 地域ネットワークの重要性が改めて確認された。2度にわたって行われたネットワーク会議も学び合いの場となり、継続を希望する声があった。
- ④ 地域ネットワーク構築が難しい学校のために、テーマ別ネットワーク形成を呼びかける。この指しまれ方式で例えば「離島ネットワーク」「気候変動ネットワーク」等。SNSも活用する。
- ⑤ 様々なユネスコスクールに関わるネットワークや事業との連携をし、相互の成長を図る。例えば「サステイナブルスクール」「ESDユース」「フードプロジェクト」等。
- ⑥ ASPUnivNet（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）のサポートをこれまで以上にお願したい。
- ⑦ ユネスコスクール公式ウェブサイトを有効活用する。まずは、アクセスし、ログインしてみたい。
- ⑧ OTA(Online Tool for ASPnet)を活用する。世界のユネスコスクールと繋がるシステムがユネスコ本部で開発され、稼働し始めている。

次に、これらを基にデザインした「ネットワークデザイン」について説明したい。ユネスコスクールの地域ネットワーク同士は緩やかにつながっていくが、すでにさまざまな取組やESD関連の授業があり、これから立ち上げられるものもある。関わりのあるところについては行き来しながら情報を共有し、さまざまな団体からサポートを受けていくという形になると思う。

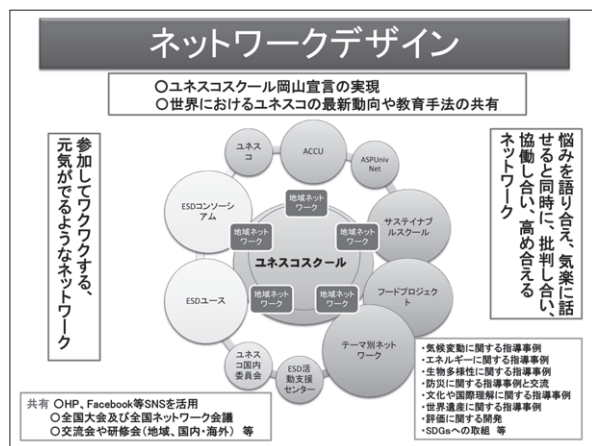
大切なのは、“自発的なネットワークをつくっていかう”ということが示された「ユネスコスクール岡山宣言の実現」と「世界におけるユネスコの最新情報や教育手法の共有」だが、何よりも「参加してワクワクする・元気がでるようなネットワーク」であるべきだ。“やらされている”“嫌々やっている”のでは長続きしないので、まさに持続可能であること、やっている人たちがまず楽しむことが何よりも大事だろう。そして、テーマ別ネットワーク例として、「気候変動に関する指導事例」や「SDGsへの取組」などが立ち上がってくると、地域ネットワークでは関われないところも集まれるようになるのではないかな。その共有方法としてはホームページやフェイスブックなどのSNSを通じた共有が非常に重要になってくるだろう。また、この「全国大会およびネットワーク会議」、地域での「交流会や研修会（地域、国内・海外）」などを通して、このような形のデザインが実現していくことが大切である。

共有の方法としては、「ユネスコスクール公式ウェブサイト」がある。現在、アンケートや助成金のお知らせなどが掲載されているので、ぜひご覧いただきたい。また、教材やグッドプラクティスなどの各種情報が、活用方法も含めて掲載されている。まず、ここで“つながり合おう”と考えていくことが重要だと思う。

また、フェイスブックについては、若い先生方から「いつでもどこでも誰でも気軽にアクセスでき、色々な意見を投稿し、意見交流や集まる場が必要ではないか」という意見が聞かれたので、全国の仲間との学び合いの場として「全国の仲間との学び合いの場 ASPnet」というページを立ち上げた。また、今後はテーマ別のネットワークについても立ち上げていきたいと考えている。

「OTA（Online Tool for ASPnet）」にもアクセスしてみたところ、すでに日本の全ユネスコスクールの名前が挙げられていた。世界とつながるツールがこうした形で稼働し始めている。

今大会のテーマ「つなぐー全国へ、世界へ、そして次世代へ、未来へ」を実現するためにも、“つながる”という意識を持って、まず私たちの方からアクセスし、さまざまなつながりを築いていくことが大切である。各種仕組みやツールが整備されてきているので、あとは我々が一歩踏み出すことだと考えている。



ランチオンセッション（協力会社による社会貢献活動紹介）

イオントップバリュ株式会社 ～若い力と築く持続可能な社会「買い物が未来を変える」



イオンは、「お客さまを原点に平和を追求し、人間を尊重し、地域社会に貢献する」とともに、「小売業は平和産業である」という理念を掲げ、地域社会および国際社会の一員として社会貢献活動を行っている。

格差や貧困の問題は子供にも及び、震災を経て消費に対する考えも「誰かのために買いたい」に変化している傾向がある。教育現場も大きく変わり、2012年の消費者教育推進法の可決時には出前授業への希望が多数寄せられた。現在では、年間約40校の小学校から大学に「倫理的消費とは何か」というテーマを中心にした授業を行っている。

出前授業では、持続可能性の観点から消費者教育や研究課題の発表を行い、最後には店舗をもつ小売業の強みを生かし、店舗で発表してもらっている。例えば、滋賀県はじめ全国の小学校で、生徒が田植えから稲刈りまで行い、学習成果を店舗で発表し、作ったお米を店舗のお客様に提供した。また、さまざまな持続可能な商品（フェアトレード、FSC認証他）がある中で、売り場にある商品を確認し「どういった商品を選ぶべきか」という倫理的消費に関する教育も行っている。商品開発事例には、世界各地から広島に寄せられる折り鶴の再生紙を使ったばち袋や、すぐ壊れる・錆びるといったビニール傘のイメージを一新し、環境負荷がかからず壊れにくい素材で着せ替えもできる傘「fururi（ふるり）」などが挙げられる。

SDGsの「誰ひとり取り残さない」は、未来を買い物で変えることではないかと思っている。「地域」の一員としてのイオンを、ESDの実践の場として今後も広くご活用いただきたい。

発表者：有本 幸泰（マーケティング本部）

ネスレ日本株式会社 ～自分のからだは自分でつくる「ネスレ ヘルシーキッズ プログラム」



「ネスレ ヘルシーキッズ プログラム」はネスレのCSV（Creating Shared Value: 共通価値創造）の3つの注力エリアの1つ「栄養・健康・ウェルネス」の主要な取組のひとつであり、栄養プログラムと運動プログラムで構成されている。2015年末時点で、既に84カ国で展開されており、子供たちの環境や健康課題は地域により異なることから、国ごとに子供たちの課題を分析してプログラムを開発している。

日本では心身の成長の基盤である「食ること」や「からだを動かすこと」に対する関心が低く、さらに自分に自信を持って積極的に行動

できない子供が多いことが指摘されていることから、「自分のからだは自分でつくる」をコンセプトにしている。栄養プログラムでは食ることの意味、食べ物の働きや栄養バランス、丈夫な骨について学び、運動プログラムでは栄養の知識を使ってからだを動かす「ヘルシーキッズ鬼ごっこ」、限られたスペースで一人でもできる「ヘルシーキッズBRTプログラム」に取り組んでいる。2015年末までに延べ6千校を超える小学校、120万人以上の児童に教材を提供した。先生方の評価では、90%以上に「良い」と評価いただき、子供たちの理解や行動にも変化が出ているという報告を受けている。

さらに、学校現場のみならず、地域コミュニティでの異世代間交流も可能な「ヘルシーキッズ健康卓球」も開始した。この取組を通して、地域コミュニティの活動が活発化し、学校現場での取組を強化できれば良いと思っている。今後も持続可能な社会の担い手としての子供たちの健康に貢献していきたい。

発表者：富田 英樹（ステークホルダーリレーションズ室長）

株式会社ユニクロ ～“届けよう、服のチカラ” プロジェクト



“届けよう、服のチカラ” プロジェクトは、ユニクロが行う「全商品リサイクル活動」の一環として、2013年から実施している。回収した衣料は主に、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を通じ、世界中の難民・避難民のもとに届けられる。現在、1,632万着の服を59の国や地域にお送りしている。

本プロジェクトでは、まずユニクロ社員が出張授業を実施し、服のもつ役割や寄贈先である難民・避難民の課題についてレクチャーする。その後、児童・生徒がポスターなどを作成して校内や地域に告知し、衣料の回収を行う。衣料の寄贈

後には、ユニクロより難民キャンプでの寄贈レポートを共有している。

2016年度は全国47都道府県の小中高270校（ユネスコスクールは53校）、約3万人の児童生徒が参加した。今年度は、難民キャンプの子供たちへメッセージを届ける活動や参加校の先生が集う活動報告会も新たに実施している。先生からは「国際問題への関心・理解を深められた」「地域とのつながりが強くなった」「社会貢献への意識が変わった」などのご意見を頂いている。

ESDの観点では、体系的な思考力や持続可能性に関する価値観の醸成にアプローチできる取組になっているのではないかと考えている。現在SDGsについても支援活動を模索しており、来年度から持続可能な開発のための企業活動をより包括的に伝える機会も設ける予定である。今後も、本プロジェクトを通じて未来を担う子供たちの育成に努めていきたい。

発表者：シェルバ 英子（サステナビリティ部 ソーシャルイノベーションチーム）

閉 会 式

1. 表彰式

1) 受賞校の発表

【第7回ESD大賞受賞校】

文部科学大臣賞	：岡山県立和気閑谷高等学校
ユネスコスクール最優秀賞	：宮城県気仙沼市立唐桑小学校
小学校賞	：岡山県岡山市立第三藤田小学校
中学校賞	：東京都多摩市立東愛宕中学校
高等学校賞	：私立渋谷教育学園渋谷中学高等学校
審査委員特別賞	：群馬県立利根実業高等学校
【企業特別賞】	
ネスレ日本ヘルシーキッズ賞	：宮城県気仙沼市立面瀬小学校



2) 講評 ～佐野 金吾（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム 理事）

◆「文部科学大臣賞」受賞校：岡山県立和気閑谷高等学校

テーマは、論語の「『恕』（「思いやり」の意）の精神を備えたグローバル人材育成プログラム」。ねらいには、恕の精神を拠り所として生徒の多様な主体性を尊重する教育活動と海外研修の体験を関連づけ、思いやりの心と国際感覚を育み、自分と地域、地球の課題を結び付けて取り組むことのできるプログラムの開発を挙げている。

活動は、国際理解講座の開催と「総合的な学習の時間」の活用にある。1学年では和気の魅力発見、2学年では町民・企業・識者によるフィールドワーク、3学年では大学教員・企業・団体職員などによる講義とデパート・役場・学校などを訪問して探求学習を実践している。

学校を核とした地域を創生する取組が高く評価され受賞に至った。

◆「ユネスコスクール最優秀賞」受賞校：宮城県気仙沼市立唐桑小学校

テーマは、「地域の方々との交流を通し、豊かな心をもち、ふるさと唐桑を愛する子供の育成～カキ養殖や野菜栽培の活動を通して～」。ねらいには、地域の自然環境を活用し、ふるさと唐桑が今後も持続可能な社会として発展していくことができるよう、探求心と実践力を養うことを挙げている。

活動の場は主に「総合的な学習の時間」だが、さらに生活科、理科、社会と一緒に活動している。小学1～6学年までの発達段階に応じた「海」をテーマにする課題解決学習と体験的学習を6年間通して計画的、継続的に実施している。

ESDの理念に基づいた学校を挙げての取組が評価され受賞に至った。

◆「小学校賞」受賞校：岡山県岡山市立第三藤田小学校

テーマは、「いのちの学習（宝物プロジェクト&幸せプロジェクト）」。ねらいは「さまざまなつながりの中から、自分を見つめ直し、自分の生き方を考えていく子を育てる」で、主に「総合的な学習の時間」を中心に全教科を連携させて活動している。

活動は6年間を見通したカリキュラム・マネジメントのもとで行われた。この活動を通して、児童一人ひとりが自己の成長を自覚できるようになり、教師も児童一人ひとりの学力や心の変容を捉えられるようになった。さらに、当小学校の取組は中学校区の各学校に波及し、各学校同士が連携しESDに取り組むようになった。

◆「中学校賞」受賞校：東京都多摩市立東愛宕中学校

テーマは、「地域再生の核となるESDの協働～ソーシャルキャピタルの深まりを目指して～」。当地域は昼間、ほとんど高齢者と子供のみの町になる。そこで中学生が中心になり地域の再生に取り組むことをテーマに設定した。

活動はホールスクールアプローチとして全学年、すべての教育活動で行っている。特色ある活動の一つである災害安全教育では、生徒全員が「防災自助パック」を準備し、認知症サポーター資格を取得、老人会と防災マップを作成するなど、地域貢献活動にも積極的に参加している。ESDの提言から、中学生が核となり地域再生への新たな取組が始まっている。

◆「高等学校賞」受賞校：渋谷教育学園渋谷中学高等学校

テーマは「自ら調べ、考え、行動し、発信する授業」。ねらいには、①地球社会が抱える問題について多角的かつ専門的に学ぶ態度、②自ら調べ、考え、行動する習慣、③世界へ発信できる能力を備えた持続可能な地球社会構築の一助となる人材の育成を掲げている。

主な活動には、高齢化・少子化・女性の社会進出、子供の人権、水不足、再生可能エネルギーなどの課題を教科横断的にアクティブラーニングで行い、学びの成果を英語で発信する力を身につけるなどがある。社会の問題を自分のこととして考え、社会参画の意識が高まったことを成果として挙げている。

◆「審査委員特別賞」受賞校：群馬県立利根実業高等学校

テーマは「専門学校としてのESD活動の取組」。ねらいには、学校の教育目標である「地域に根差した特色ある実業高校の創造」を挙げている。

この目標を達成するため、環境教育活動、食育活動、地域ボランティア活動を柱とし、環境教育では野生動物の行動調査やコミュニティガーデン設営、食育活動では地産品を活用した商品開発や小学生への米栽培指導、地域ボランティアでは地域清掃や募金活動など、さまざまな活動を行っている。活動を通して学校と地域との連携が深まり、生徒が自覚を持って活動し、一人ひとりが達成感・充実感を感じるようになったことなどを成果として挙げている。

◆「ネスレ日本ヘルシーキッズ賞」受賞校：宮城県気仙沼市立面瀬小学校

テーマは、「海と生きる、気仙沼 魚のよさを伝えよう」。ねらいには、「地域の基幹産業である水産業と魚食について探求する活動を通して、地域の人々の生活が自然環境に支えられながら成り立っていることに気づかせること、魚食の優れている点に気づき、自分の生活に進んで取り入れようとする態度を育てること」を掲げている。

ネスレ ヘルシーキッズ プログラムを活用した活動で、1) 気仙沼を知る、2) 気仙沼の海の恵みを知る、3) 海洋教育こどもサミットを開こう、という3ステップで調べたことを発表し、海や資源を守るためにできることについて考える学習に取り組み、発信している。

当賞の評価基準にかなった実践として評価され受賞に至った。

3) 各賞の授与

◆文部科学大臣賞

賞状・副賞授与：森本 浩一（文部科学省国際統括官）

◆その他賞

賞状授与：木曾 功（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事長）

副賞授与：木村 則昭（カシオ計算機株式会社 CSR推進室長）

◆ネスレ日本ヘルシーキッズ賞

賞状・副賞授与：富田 英樹（ネスレ日本株式会社ステークホルダーリレーションズ室長）

2. 閉会挨拶 ～木曾 功（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム 理事長）

全国大会も8回目を迎えた。私は8年前、文部科学省国際統括官の職に就いていたが、当時のユネスコスクールはわずか24校程度であった。ユネスコスクールを増やしESDを全国的に大きく広げるため、地方のESD拠点校としてユネスコスクールを全国に500校つくりたいと考えていた。当時は実現できるのか不安もあったが、8年間でここまで大きくなり、感慨深いものがある。

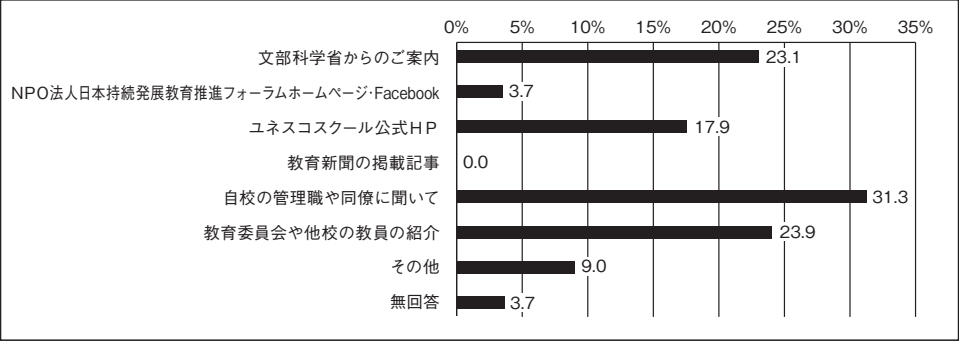
ESDが21世紀の考え方の大きな潮流になると信じている。教育界だけでなく、世の中全ての分野で「持続可能性」というコンセプトが非常に重要な考え方の柱になってきている。教育も大きな社会のサブシステムの一つなので、全体がそうした動きであれば、当然、教育もその大きな影響のもとにある。

本日お集まりの先生方には、「21世紀の新しい教育をつくっている、今まさにその中心にある」と信じて、ぜひ頑張ってください。

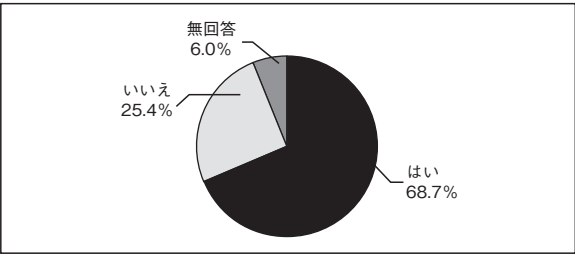


アンケート結果

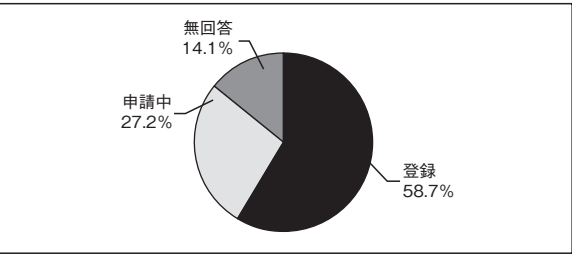
Q1 研究大会認知経路(複数回答可) n=134



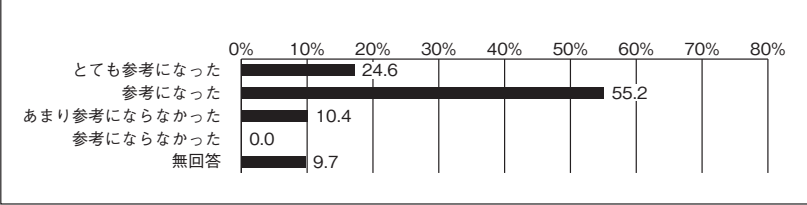
Q2 ユネスコスクール登録校ですか n=134



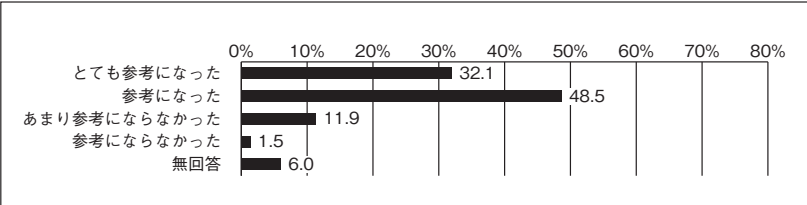
(ユネスコスクール登録校の方に)
Q2SQ ユネスコスクール登録・申請中の内訳 n=92



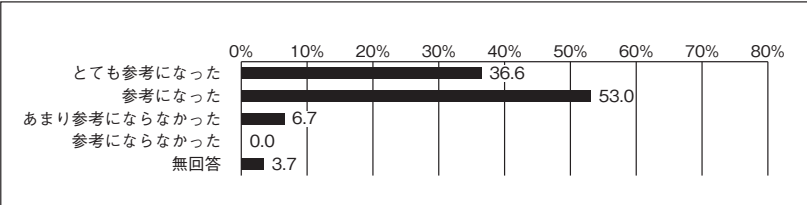
Q3-1 「開会式」の参考度 n=134



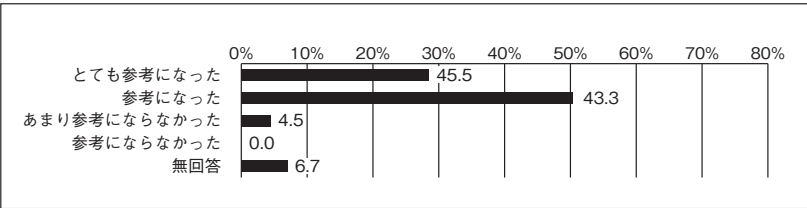
Q3-2 「ESDの更なる推進に向けて」の参考度 n=134



Q3-3 「パネルディスカッション」の参考度 n=134



Q3-4 「ランチョンセッション」の参考度 n=134



協力企業一覧（50音順）

イオントップバリュ株式会社
ネスレ日本株式会社
株式会社ユニクロ

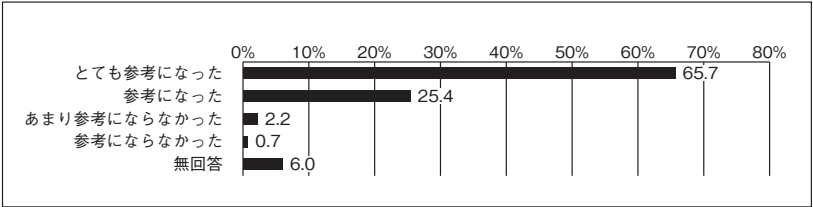
展示団体一覧（50音順）

ESD活動支援センター
ESD・国際化 ふじのくにコンソーシアム（静岡大学教育学部）
独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局
志賀高原ユネスコエコパーク協議会
ジャパンアートマイル実行委員会
国立大学法人信州大学
日米教育委員会（フルブライト・ジャパン）
特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟
白山ユネスコエコパーク協議会
北陸ESD推進コンソーシアム（金沢大学）
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
横浜市ESD推進コンソーシアム

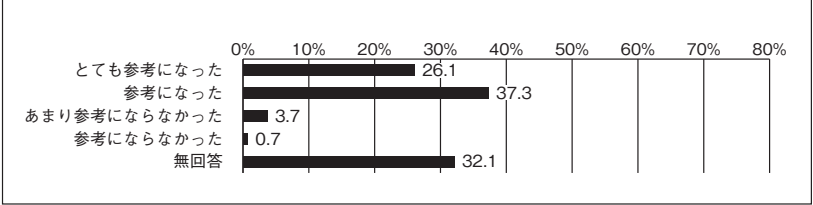
第8回ユネスコスクール全国大会 持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会 報 告 書

発行日：平成29年 3月14日
発 行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
<http://www.jp-esd.org/>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1 - 40
電話 03-3295-7051
F A X 03-3295-7054
E-mail:info@jp-esd.org

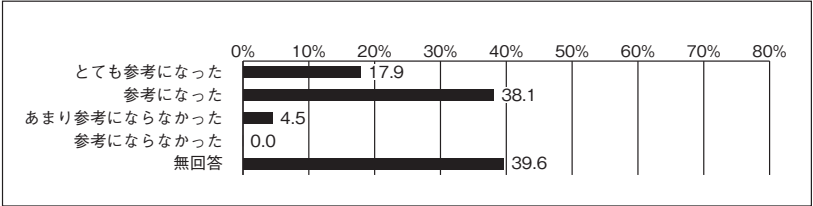
Q3-5 「テーマ別交流研修会」分科会の参考度 n=134



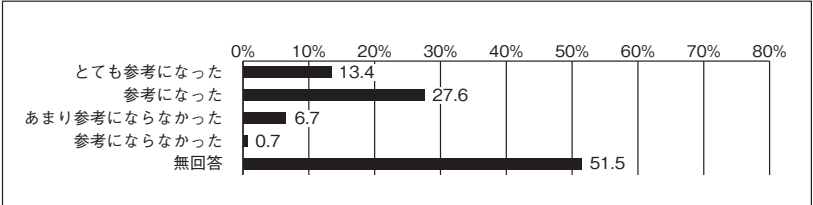
Q3-6 「テーマ別交流研修会の報告」の参考度 n=134



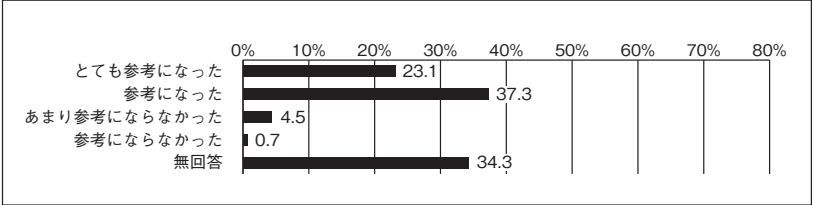
Q3-7 「ネットワーク構築について報告」の参考度 n=134



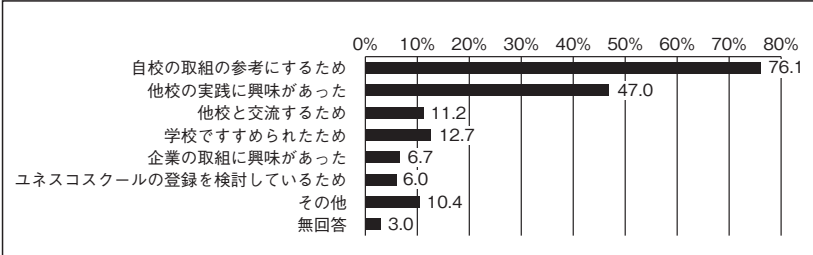
Q3-8 「第7回ESD大賞授賞式・閉会式」の参考度 n=134



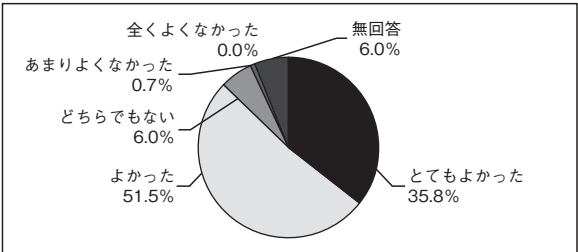
Q3-9 「企業展示・団体展示」の参考度 n=134



Q4 本大会参加目的（複数回答可） n=134



Q5 大会全体の感想 n=134



Q6 次年度以降の参加意向 n=134

